

## 富貴原章信博士追憶

桜部 建

大谷大学の佛教学科は、先に安藤俊雄教授を喪い、いままた富貴原章信教授の急逝に遭う。うたた寂寥の感に耐えない。

富貴原博士が、現時の佛教学界において、確乎として特異な地位を占めていらしやうことは、多言を要しない。その業績の真価はわたしなどの窺察の及ばぬところであるが、日常の何気ない談語の中で、ふと、学人としての概に触れしめられるようなことが時々あった先生のお人柄を、今はただなつかしくお偲びする。魁偉と申してもよからう立派な体格と太いお声、そして愛された酒からして、人はあるいは豪放磊落の気性を想像したかもしれないが、実は心のやさしい、また、一面に真似のできぬほどの謹直さをも具えたお方であったと思う。

お書きになった文章の中にしばしば、俗事に関わらず名利や榮達を求めずひたすら経論釈に沈潜した中世の学僧たちのことが、出て来る。そんな箇処では先生の筆がにわかにはあらわな称嘆と追慕の調を帯びる。そのような人々によってこそ唯識宗の学問は——そして広く佛敎の学問も——伝えられて来たのだし、また伝えられて行くべきものだ、というのが先生の信念であったに違いない。

先生の晩年のお仕事の中に、二つの古佚書の解説・研究がある。新羅の元暁の『判比量論』と南都興福寺の中算(ふつう仲算に作るようであるが、先生は写本に基づいて中字を採っておられる)の『賢聖義略問答』とである。いずれも神田香巖居士の蒐集愛蔵せられた古写本の逸品に基づき、神田喜一郎博士が佛恩報謝・令法久住の懇念をもってその本文を印行頒布せられたものに、附せられた細密な解説・研究・解説である。このような難作業を遂行するは先生を除いて「他にその人が無い」として神田博士が「万事を挙げて」先生にそれを委託された結果、成った「精到実はこの上もない」とされた研究である。先生の一生を捧げられた学問の、往きついた境地の、少くとも一面が、この二労作によってよく示されているように思われる。

「労作」といった。それに違いないが、この仕事を進めつつ先生自身は、労よりもむしろ私かな愉悅を、味わって居られたに相違ない。試みに『賢聖義略問答の研究』を翻いて「中算の略伝」「俱舎の学問」あたりの叙述を見よ。

平安朝唯識宗の背景から筆を起こして、興福寺の中算の出現、その人柄に軽く触れたかと思うと、一転して唯識宗の日本化、乎古止点や送り仮名の發達のことを語る。と、また中算に戻ってその俊才ぶりを説き、応和の宗論のことに因んで、最澄・徳一以来の一乘三乗の論争をふりかえる。中算の述作を紹介する傍ら、遠く慈恩の法華玄贊の説を承けて中算・真興・清範と次第した南都唯識宗における一乘思想の流れを瞥見し、それにたい対する天台の源信、華嚴の親圓らの一乘説・佛性論にも軽く

触れる。そこで、また、転じて唯識義林章に対して明憲・真興・清範らの積があったことを述べつつ、それらの先駆としてのこの賢聖義略問答には所積の賢聖章に広略二本あり、略本は義林章に含まれるそれ、広本は別行の一卷本二十七賢聖章であつて、略問答が積する所は主として後者である、と断ずる。そして、略問答卷一の内容に入りつつ、筆はいつの間にかわが国初期俱舍学史の素描に移る。八・九世紀の交、南寺・北寺における俱舍宗の大勢を語り、南寺の三論・俱舍の学統はのちに多く

東大寺に移ったが俱舍宗の聖教の一部は石山寺に伝わったし一部はあるいは北寺にも入ったか、と推測して、中算その人の相承した俱舍学の系譜をそこに浮び上がらせている。

何という屈託のない筆運びであろう。字句の細瑾には拘泥せず、次から次から囊中の物を取り出しては示すような先生の語り口の中に、学問的自受用法楽を感じるのはわたしだけであろうか。こういう学者に、わたしたちはもう接することがないのではあるまいか。

目録 十二頁  
第一章 俱舍宗の成立とその歴史 一  
第二章 南寺の成立とその歴史 一  
第三章 北寺の成立とその歴史 一  
第四章 南寺の学統とその歴史 一  
第五章 北寺の学統とその歴史 一  
第六章 南寺の学統とその歴史 一  
第七章 北寺の学統とその歴史 一  
第八章 南寺の学統とその歴史 一  
第九章 北寺の学統とその歴史 一  
第十章 南寺の学統とその歴史 一  
第十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第二十章 南寺の学統とその歴史 一  
第二十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第二十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第二十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第二十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第二十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第二十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第二十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第二十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第二十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第三十章 南寺の学統とその歴史 一  
第三十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第三十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第三十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第三十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第三十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第三十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第三十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第三十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第三十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第四十章 南寺の学統とその歴史 一  
第四十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第四十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第四十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第四十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第四十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第四十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第四十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第四十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第四十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第五十章 南寺の学統とその歴史 一  
第五十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第五十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第五十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第五十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第五十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第五十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第五十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第五十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第五十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第六十章 南寺の学統とその歴史 一  
第六十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第六十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第六十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第六十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第六十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第六十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第六十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第六十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第六十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第七十章 南寺の学統とその歴史 一  
第七十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第七十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第七十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第七十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第七十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第七十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第七十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第七十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第七十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第八十章 南寺の学統とその歴史 一  
第八十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第八十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第八十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第八十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第八十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第八十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第八十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第八十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第八十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第九十章 南寺の学統とその歴史 一  
第九十一章 北寺の学統とその歴史 一  
第九十二章 南寺の学統とその歴史 一  
第九十三章 北寺の学統とその歴史 一  
第九十四章 南寺の学統とその歴史 一  
第九十五章 北寺の学統とその歴史 一  
第九十六章 南寺の学統とその歴史 一  
第九十七章 北寺の学統とその歴史 一  
第九十八章 南寺の学統とその歴史 一  
第九十九章 北寺の学統とその歴史 一  
第一百章 南寺の学統とその歴史 一